騎馬像の居場所

大坪 潤子

はじめに

少し前までNHKの番組「クローズアップ現代」のオープニングに使われていたアニメーションにあらわれる、街の広場とそこを行き交う人々。ほんの一瞬しか映し出されないものだったが、その広場の中央には、銅像――騎馬像があった。

街に広場があり、広場には銅像がある――というイメージが、ここにあらわれている。しかし、現実にはこの国でそのような事例は非常に少ない。にもかかわらず、このアニメーションに限らず「広場の騎馬像」は銅像の典型例として少なからず連想されているのではないだろうか。

都市の広場における、空間に圧倒的な存在感をもって建つ支配者や英雄の騎馬像。このイメージは幕末から現在に至るまで、ヨーロッパの作例が版画や絵画、写真などを通して受容されてきた。

けれども、イメージの受容の一方で、実際に国内では誰の騎馬像がどこに建てられてきたのか。それらはどのような役割を担ったのか。

筆者はこれまで、銅像を美術史と近現代史のはざまにある資料として調査研究をおこなってきた。そこでは「彫刻」として単なる作家研究や造型論にとどまることなく、誰が（建設提唱者や賛同者、原型制作者、鋳造者、台座設計者など）、誰を（像主）、いつ（計画～除幕）、なぜ（建設趣旨・背景）、いくらで（経費）、どのような形で（形式・ポーズ）、どこに（建設場所）、といった視座で捉えることが必要となる。このうち、これまで個別事例を追うばかりで類例として考える意識の薄かった、騎馬の形式をとる銅像について、明治から太平洋戦争前に国内で建てられた作例を確認し、さらにその中からいくつかの像について主に像主や場所の変遷から分析を試みたい。

騎馬像とは、言うまでもなく馬にまたがった人物像の形式である。図像としてはもちろん絵画でも表されるが、ここでは主に屋外における特定の人物――英雄として顕彰される人物、あるいは権力を誇示する人物――のモニュメントとしての彫刻、いわゆる「銅像」としての騎馬像を扱う。

Ⅰ　騎馬像の系譜

まず、騎馬像の流れについて簡単にまとめておく。古代ローマでは、皇帝の騎馬像が記念碑として作られてきた。4世紀、キリスト教徒によってローマ皇帝達の騎馬像は現存のマルクス・アウレリウス帝像を除き破壊されたが、それ以降も、ヨーロッパではヴィットリオ・エマヌエーレ2世像（ローマ、ヴェネツィア広場、写真1）やルートヴィヒ1世像（ミュンヘン、オデオン広場）、ルイ14世像（パリ、ルーブル宮前）、リチャード1世像（ロンドン、国会議事堂前）など、王宮前や国会議事堂前などの広場を中心に、支配者や将軍達の堂々たる騎馬像が建てられてきたのである。

一方、国内ではどうだろうか。ヨーロッパ式の、銅像としての騎馬像は明治になって作られるが、かといってそれまで騎馬という図像自体が存在しなかったわけではない。そこに込められる意味を探るために、騎

写真1　大正7年に国内で使用された絵葉書：ヴェネツィア広場のヴィットリオ・エマヌエーレ記念堂と騎馬像（中央）

馬にかかわる造型の流れを確認したい。[1]

「騎馬」という図像は、平安期、主に公卿や勅使らが儀式の場で馬に乗る姿として絵巻等に現れた。[2] ここでの馬は、貴人が特別な場で乗るものという性格をもつ。やがて、騎馬武者の台頭により鎌倉期の合戦絵等から騎馬の姿は盛んに見出せる。また特に太平記の中で平知盛・重衡や木曽義仲、那須与一らが愛馬と共に語られたことは、馬が戦いのために欠かせない乗り物であると同時に、主人に忠誠を尽くす存在として位置付けられていた証しとして興味深い。

この後、騎馬武者は実際の戦いの中心からも造型の場からも遠ざかる。近世の郷土玩具（土人形）において騎馬武者の他に馬上の天神像や花嫁像等が見られるが、一貫して、騎馬する人物として表されるのは原則として貴人か武人であったと言えそうである。

そして明治期、工部美術学校や海外で学んだ彫刻家、また仏師や牙彫の流れを汲む東京美術学校の教授陣らが、騎馬像を含む「銅像」を手がけ始める。本格的な「銅像」第一号には、明治26（1893）年に除幕した靖国神社境内の《大村益次郎像》（立像）が挙げられるが、騎馬像の建設は明治30年代まで待たねばならなかった。[3] 理由としては、第一には技術的な問題が挙げられる。銅像は（言葉通りに捉えれば）ブロンズ――銅と錫などの合金――であるから、粘土や木による原型から鋳造しなければならない。この時、人物あるいは馬のみの単独像と比べて、騎馬という複雑な形を鋳抜き接合すること、そして馬の細い脚、それも場合によっては後脚だけの二点で構造上無理なく自立させることは非常に難しいという。[4]

次に、費用の問題がある。銅像の建設にあたっては、原型制作、鋳造、台座設計・施工、運搬費等をまかなうために通常関係者による募金が行われるが、単純に考えても騎馬像は人物単体像の倍以上の制作費がかかる。銅像というものが広く認識されるまでは、あるいは有力な出資者が付かない限り、騎馬像の建設は簡単には進まなかったであろう。果たして、実際にはどのような騎馬像が建てられたのか、次に見ておきたい。

Ⅱ　騎馬像の制作

この国で建てられた銅像を具体的に知ろうとするとき参考になるのが、昭和3（1928）年発行の銅像写真集『偉人の俤』（二六新報社）で、これには643件の「銅像」[5]が収められている。太平洋戦争中の金属供出により戦前の銅像の大半が姿を留めない現在、大変貴重なデータである。これを基に行われた、戦前に建てられたことのわかる銅像670件の全国調査に筆者も参加し報告書[6]を作成したが、対象像の内、騎馬像は17件（2.5％）と、非常に少なかった。ちなみに最多は立像で349件（52％）、次いで胸像・上半身像が230件（34.3％）、座像（正座した像）・椅像（椅子に腰掛けた像）は44件（6.5％）となっている。

この騎馬像17件に調査漏れの1件を加え、比較のために基本情報をまとめたものが、別掲の表1である。『偉人の俤』に収録された《福島安正像》、《毛利敬親（たかちか）（忠正）像》、《毛利元徳像》、《楠木正成像》、《北白川能久（よしひさ）親王像》、《有栖川宮熾仁（たるひと）親王像》、《長岡護全（もりはる）像》、《南部利祥（としなが）像》、《小松宮彰仁親王像》、《山内一豊像》、《大山巌像》、《鍋島直茂像》、《寺内正毅像》、《村山義信像》、《松平直政像》に、発行後に建設された《山県有朋像》、《明治天皇像》、《伊達政宗像》を加えた。

この中で最も早い作例の《福島安正像》は、シベリア単騎横断を行った福島の姿を表したとみられる。現所在は不明で、写真から置物的な小像と思われることと靖国神社遊就館内に納められていたことから、はじめに述べた本稿での「騎馬像」とはやや性格を異にするが、興味深い作例であるので今回の表に含めた。[7] 《明治天皇像》も当初から旧多摩聖蹟記念館内に置かれているが、実現した唯一の天皇騎馬像として重要であるため加えた。なお戦後については、《前田利長像》（1975年、高岡古城公園）、《太田道灌像》（1989年、日暮里駅前）、《前田利家像》（2000年、金沢市尾山神社）など、藩主や武将の騎馬像が現在に至るまで建てられているが、全国的な調査をおこなっておらず実数や内容を把握できていないため今回は表に含めない。

さて、表からわかるとおり、銅像としての騎馬像の嚆矢は、有名な《楠木正成像》の他に、ほぼ同時期に建てられた長州藩主の2像がある。供出されたため知る人は少ないが、同じ亀山公園[8]内に建てられた他の4人の長州藩主の銅像（立像）の中で、この2像だけは騎馬像として作られた（写真2）。

騎馬像建設の最初期に、このように騎馬武者の姿が採られたことに注意したい。ヨーロッパの広場に建つ皇帝達の騎馬像が、勤皇とされる武将や藩主に置き換えられている。また楠木像の皇居前広場しかり亀山公

表1　騎馬像作例

像名	建設・所在地	服制	像高（cm）	台座高（cm）	建設年	像主職種	発願者・建設者	原型制作者	存否
福島安正像	千代田区　靖国神社遊就館内（現所在不明）	軍服	（50程度か?）	（30程度か?）	1894年5月	陸軍軍人	児玉源太郎	小倉惣次郎、近藤由一	不明
毛利敬親像	山口市亀山公園	陣装束	約300	約450	1897年（除幕1900年頃）	長州藩主十四代藩主	山口県民	長沼守敬	供出、再建（1980）
毛利元徳像	山口市亀山公園	陣装束	不明（敬親像に準ずるか）	不明（敬親像に準ずるか）	1899年6月	敬親の養子。長州藩最後（十五代）藩主	山口県民	長沼守敬	供出
楠木正成像	千代田区　皇居外苑皇居前広場	甲冑	435	435	1900年7月10日（除幕共）	武将・勤王家	住友吉左衛門	高村光雲、山田鬼斎、後藤貞行他、加納夏雄、石川光明	現存
北白川能久親王像	千代田区　近衛歩兵第一・第二連隊（現東京国立近代美術館工芸館）前	軍服・式装	370	411	1902年11月（除幕1903年1月28日）	皇族	建設委員長、長谷川好道近衛師団長	新海竹太郎	現存（移設）
有栖川宮熾仁親王像	千代田区三宅坂　陸軍参謀本部構内（→1962年港区有栖川記念公園に移設）	軍服・式装	390	440	1903年10月（除幕10月10日）	皇族	山県有朋、大山巌。建設委員長・寺内正毅	大熊氏廣	現存（移設）
長岡護全像	熊本市　水前寺成趣園	軍服	約360	不明	1906年	陸軍軍人・華族	米田虎雄、他277名	高村光雲、白井雨山、黒岩淡哉、水谷鐵也	供出
南部利祥像	盛岡市　岩手公園	軍服	約360か	約450か	1908年8月	陸軍軍人・華族	東條英教、大矢馬太郎、原敬、田中館愛橘、鹿島精一他	新海竹太郎	供出。台座のみ現存
小松宮彰仁親王像	台東区　上野公園	軍服・式装	394（379とも）	500	1912年3月18日（除幕共）	皇族	陸海軍赤十字社その他有志	大熊氏廣	現存
山内一豊像	高知市　藤並神社境内	甲冑	約490	不明	1913年11月12日（除幕共）	武将・藩祖	旧土佐藩士有志	本山白雲	供出、再建
大山巌像	千代田区　三宅坂陸軍参謀本部構内（1947年上野公園、1965年九段坂上に移設）	軍服	400	370	1919年	陸軍軍人	井口省吾、他	新海竹太郎	現存（移設）
鍋島直茂像	佐賀市　上多布施町	甲冑	不明	不明	1922年11月9日（除幕共）	武将・藩祖	佐賀市長野口能毅、他有志多数	諏訪頼雄	なし（破棄）
寺内正毅像	千代田区　三宅坂	軍服	不明	不明	1923年5月	陸軍軍人	友人一同	北村西望	供出
村山義信像	佐世保市　八幡神社境内	甲冑	273	不明	1924年6月	武将・勤王家	忠臣村山氏銅像建設会	桑野元次郎	不明
松平直政像	松江市　城山本丸	甲冑	400（台座含む）		1927年10月5日	藩祖	旧出雲藩士、縁故者300名	米原雲海	供出。台座は近年撤去
山県有朋像	千代田区　三宅坂旧陸軍参謀本部構内（1947年上野公園、1962年井の頭公園、1992年萩市に移設）	軍服	450	150	1929年	政治家・陸軍軍人	陸軍省	北村西望	現存
明治天皇像	多摩市　連光寺旧多摩聖蹟記念館内	軍服	325	約15か	1930年（除幕11月9日）	皇族	田中光顕	渡辺長男	現存
伊達政宗像	仙台市　仙台城跡	甲冑	420	480	1935	藩主	宮城県青年団	小室達	供出、一部現存、再鋳（1964）

写真2　絵葉書「山口市と湯田温泉　亀山園の旧毛利宗支藩主六銅像」中央の木を挟む二像が騎馬像

園しかり、城跡にできた広場や公園という要素が、像主と場所とを結びつけている。城跡に建つこと――これは戦前に建てられた藩主の騎馬像の特色である。人々は像を通して、かつてこの地が何であったのかという記憶を読みとるであろう。

武者姿の騎馬像に続くのは、小松宮彰仁親王など、同時代の皇族や華族を像主とする騎馬像である。彼らは皆、騎乗して戦う軍人として、あるいは軍を率いる大将として軍服姿で表されている。現在でこそこうした銅像は古めかしい印象を持たれるが、建設当時はむしろ新しい存在として受けとられたことだろう。

皇族――親王の騎馬像については、木下直之氏が指摘されているように、明治6（1873）年から皇族の男子が陸海軍の軍職に就くことが定められ、[9] 軍人勅諭に謂う「兵馬の権」を司る、「武士の棟梁に代わる強い天皇像」のサポートを求められた結果である（木下　1996：304-305）。そしてこれらの騎馬像は、像主の出自ではなく生前の役職を象徴する場（軍関係の建物前など）に建てられた。

一方の華族についても、皇族のような義務は課せられなかったものの「成ルベク陸海軍ニ従事候様」[10] と、やはり軍務に就くことが期待された。ただし騎馬像となったのは、華族の中でも大名家出身の、いわゆる「武家華族」として戦死した2名だけである。後述のとおり、彼らは藩主達と同じ城跡や旧藩ゆかりの公園に建てられた。

この後、藩主に混じって、《大山巌像》をはじめとする、藩主でも皇族でも華族でもない生粋の軍人の騎馬像が現れる。陸軍の元帥や大将であることが、騎馬像たる充分な理由となった。いずれも三宅坂の陸軍参謀本部構内に建てられ、まさに当時の陸軍の象徴的存在だったことだろう。ただ、「上野の西郷さん」などと違い、どこまで広くこれらの軍人騎馬像が人々の目に触れていた（触れやすい場所だった）か、馴染みやすい存在だったかは検討を要する。

総じて国内の騎馬像は、平安期の、儀礼などに用いる貴人の乗りものとしての特権的な意味を引き継いでいたとしても、それは優美な姿ではなく、あくまで戦いを象徴する、甲冑や軍服姿の武者や軍人、そして両者の性格を備えた「戦う皇族」の乗りものとして表されている。そして現在は軍人の騎馬像がタブーである一方で、近世の「騎馬武者像」は、ゆかりの城跡だけでなく、駅前などにも建てられ続けている。

Ⅲ　騎馬像の居場所

次に、これまで調査した中から事例報告として2件の武家華族の騎馬像を中心に述べる。公園から供出された《長岡護全像》（写真3）と、移設され公園に現存する《有栖川宮熾仁親王像》（写真7、8）である。騎馬像という存在を考える上で、ここでは特に「場」を中心に、どのような視座が可能であるか試してみたい。

①《長岡護全像》

熊本の観光名所である水前寺公園は、正式名称を水前寺成趣園（じょうじゅ）といい、細川家3代忠利（1586-1641）がこの地に茶屋を設けたのに始まる回遊式庭園である。園の作りは東海道五十三次を模したといわれ、阿蘇の伏流水が湧き出す池を中心とし芝に覆われたなだらかな起伏が広がり、それらを樹々が取り囲んでいる。西に位置する正門から園に入ると、左手前に石橋があり、池の対岸ほぼ中央には富士山と名づけられた芝山を松越しに望むことができる。この眺めは、熊本名所・水前寺公園におけるベスト・ビューとして、繰り返し絵葉書等に用いられてきた（写真4）。現在この園を神苑とする出水（いずみ）神社は、明治11（1878）年、歴代藩主及び2代忠興夫人ガラシャを祀る神社として、有志により園の北側に建てられた。《長岡護全像》（以下長岡像）の位置は正門から見て左前方、出水神社に近いなだらかな丘の中腹で、像は「富士山」と向かい合っていた（写真5）。

ここに長岡像が建ったのは、明治39（1906）年のことである。像主の長岡護全は、熊本藩第14代藩主だった細川護久侯爵の次男として東京で生まれ、叔父・長岡護美子爵（細川家分家）の養子となる。学習院初等

写真3　絵葉書「熊本百景　水前寺園内長岡護全公銅像」

写真4　絵葉書「熊本　水前寺の公園」（像建設前）

写真5　絵葉書「熊本名勝　水前寺園内の石橋」（中央やや左の白い台座に載るのが長岡像）

写真6　水前寺公園　（石橋の手前の石柱は長岡像を囲んでいたもの）（2005年　筆者撮影）

科で皇太子（のちの大正天皇）の学友をつとめたのち近衛騎兵連隊に入隊、陸軍近衛騎兵少尉として日露戦争に従軍、遼陽会戦で戦死した。

護全の銅像が騎馬像の形式をとることは、前述のとおり華族として軍務に就き、騎兵少尉であったことから当然ともいえるが、同時に護全の出自すなわち武家として、武士の象徴でありいわば特権的な乗り物としての馬に跨る姿、という意味も含まれていよう。

この点で、盛岡の岩手公園内（盛岡城本丸跡）に台座のみを残す《南部利祥像》（写真7）と長岡像はよく似た性格を持つ。また南部の岩手、長岡の熊本が共に名馬の産地であることも考えると 、騎馬像というかたちは「華族」「軍人」「藩」を表す、非常に象徴的な形式であり、必然でもあったといえる。

そして長岡像は、鎮台を抱える軍都熊本としては旧藩の記憶としても、あるいは日露戦争の記念としても、恰好のシンボルになりうる像であった。しかし既に名所として定着していた場所に建ったために遠景の一要素として捉えられ、空間的にも意味的にも、「場」の中心とはならなかったのではないか。

長岡像は太平洋戦争中に供出され、石の台座も近年撤去され残っていない。像のあった場所にはそれを示す写真付きの立て札があり、当然ながら出水神社ではこの像をご存知であったが、公園内の売店、県立図書館などで人に尋ねたところ、そのような像があったとは初耳とのことであった。現在、園内には長岡像ではなく、園を開いた忠利の、衣冠束帯姿の立像が新しく建てられている。なお、出水神社社務所の駐車場及び池にかかる石橋の手前などに、像を囲っていた鎖（これも供出したはずである）を通す石柱が車止めとして再利用されていた（写真6）。

②《有栖川宮熾仁親王像》

東京・広尾の都立中央図書館に接した港区立有栖川宮記念公園の、運動広場に面した樹木の下に《有栖川宮熾仁親王像》がある。公園の名称から、もともとこの地にあったと思われがちだが、初めは三宅坂の陸軍参謀本部（空襲により焼失）前に建てられ、戦後移設されたものである（写真8、9）。

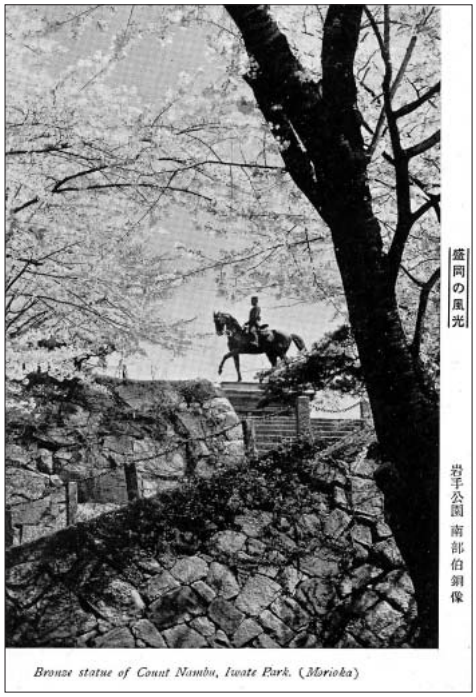

写真7　絵葉書「盛岡の風光　岩手公園　南部伯銅像」

像主の有栖川宮熾仁（1835-1895）は、有栖川幟仁親王の長男として京都に生まれ、仁孝天皇の猶子となる。孝明天皇の妹・和宮と許婚であったが和宮は降嫁、熾仁は明治新政府の総裁や戊辰戦争での東征大総督をつとめ、陸海軍の創設や指揮をおこなった。銅像は、軍隊、特に陸軍――馬を用いる軍隊――を体現する人物として、また「戦う皇族」の象徴として、馬に跨り、自らの職務のシンボルである陸軍参謀本部前という場に建てられたのである。像主の経歴上結びつきの強い場であっただけでなく、台座を含めた造型としても、背景となる参謀本部の建物を強く意識しており、一体感のある空間を作りだしていた（田中　2001：95-100）。皇族の騎馬像は他に《北白川宮能久親王像》（写真10、11）、《小松宮彰久親王像》があり、前者は有栖川宮と同じように自らが率いた竹橋の近衛連隊の建物を背景として（現在は数メートル横の茂みの中に移設）、後者は上野の「恩賜」公園の中に建てられ現存する。冒頭で筆者は銅像を「美術史と近現代史のはざま」にあると述べたが、かつては近衛連隊を率いる存在として華々しく聳えながら、現在は近代美術館工芸館の前にひっそりと、「彫刻」として美術館に入ることは物理的にも心理的にも適わぬまま建っている北白川宮の騎馬像は象徴的である。

さて、有栖川宮の騎馬像は、皇族の像であるため金属回収を免れ、[11] 戦後も東京都の「忠霊塔・忠魂碑等の撤去審査委員会」によって、撤去条項に該当せず、かつ「明治時代における美術史上の代表的作品」と認められて生き延びた。現在美術史上ではほとんど扱われないことが皮肉である。のち昭和36（1961）年に大蔵省から東京都へ管理委託され、翌年、高速道路建設に伴い有栖川宮記念公園に移設された。この地はもと盛岡藩主南部美濃守の下屋敷にあたる。熾仁の死の翌年・明治29（1896）年に有栖川宮家の用地となったが、同家廃絶のため高松宮家が祭祀と共に引き継ぎ、のち東京都に下賜され昭和9（1934）年「都立有栖川宮記念公園」として開園したものである（現在は港区が管理）。したがって、熾仁自身とこの公園に直接のつながりはない。筆者は現在港区に勤めており、有栖川宮家について時々問い合わせを受けるが、たいていはこの地に有栖川宮熾仁が居住していたと思われている。そして公園内の騎馬像への関心は低い。「有栖川宮」の名は、この騎馬像によってではなく、公園に冠された名前と

写真8　絵葉書「東京名所　参謀本部」（陸軍参謀本部と有栖川宮熾仁親王像）

写真9　港区立有栖川宮記念公園の《有栖川熾仁親王像》川上悠介氏撮影（2006年）

写真10　絵葉書「近衛歩兵第二連隊　正門及北白川宮殿下御銅像」

写真11　東京国立近代美術館工芸館前の《北白川宮能久親王像》（2005年　筆者撮影）

して知られているようである。

ここで改めて、移設前後の像を比べてみよう。

像の台座基壇が移設後では一段減ったために全体のプロポーションが変わり、より像の足元近くまで寄れる――逆を言えば引きが弱くなった――こと、移設の頃子供が乗って遊んだためにサーベルが折れ失われたままであること、[12] さらに、一体感を持っていた参謀本部のいかめしい建物ではなく、軽やかな落葉樹が背景となったこと、小さな運動広場の隅に建てられたことで、像の正面性や威圧感は消え、「軍事くささ」も薄れた。場所柄、この公園には親子連れや犬連れの、多国籍の利用者が多いが、おそらく彼らにとってこの公園や広場の中心は有栖川宮の騎馬像ではない。かといって代わる中心があるわけではなく、必要ともされない。もはや場の中心となることは出来ないが、そこにあることには疑問を持たれない居場所を見つけた像である。

おわりに

以上、国内における騎馬像の流れと作例を概観した。分析方法も内容もまだまだ不充分であり、また今回は作り手（原型制作者）については一切触れることができなかった。騎馬像を手がけた彫刻家たち――例えば馬の彫刻で名高かった後藤貞行や、新海竹太郎といった彫刻家が騎馬像というものをどう考えていたか。さらに各々の周りの空間を含む「かたち」からの分析ももっと積極的にとりいれた上で、改めて考察を行いたい。

（おおつぼ・じゅんこ）

【注】

(1)　馬単体を造型で表した例を見ると、古くは6世紀の石馬（福岡県八女市岩戸山古墳）や埴輪が出土している。また生きた馬に代わり馬の形に切り抜いた板、やがては絵馬が奉納された。馬の造型は、祈りを伴いつつ表されてきたのではないだろうか。

(2)　《駒競行幸絵巻》《伴大納言絵詞》など。また、聖徳太子の絵伝では太子が甲斐の黒駒を愛馬とし空を翔る図像がみられる。

(3)　《大村益次郎像》も、「上野の西郷さん」で親しまれる《西郷隆盛像》も建設前には騎馬像としての予想図が描かれたことがあり、実現されなかったものの騎馬像として作られる予定の像はいくつかあった（木下　2006：309-310）。

(4)　（有）ブロンズスタジオ・高橋裕二氏のご教示による。

(5)　わずかながらレリーフや人物以外の記念碑等を含む。この基準自体も興味深く、今後の分析課題としたい。なお、本書の写真は本稿で用いるには不鮮明なものが多く、また、より広く流布したと思われる構図を示すために、現況を示すもの以外は戦前の絵葉書（筆者蔵）を写真として用いた。

(6)　「戦前の文献にもとづく作品台帳作成と所在調査（全国調査）」『屋外彫刻調査保存研究会会報　第3号』2004年

(7)　他に、鎌倉宮に大塔宮護良親王の弓を持つ姿の騎馬像があるが、宝物館に納められた木像であるため（「銅像」と呼ばれるものが必ずしも銅〈青銅〉製とは限らないが）、また別の視座で論じなければならない。

(8)　築城途中で断念された長山城跡を明治33（1900）年亀山公園として開いたもの。

(9)　明治6（1873）年12月9日付　太政官達

(10)　明治14（1881）年4月7日付　宮内卿徳大寺実則より華族会館長岩倉具視宛諭達

(11)　昭和18（1943）年12月10日の閣議決定「銅像等の非常回収に関する件」（公文類聚第67編）により、「皇室、皇族、王族に関するもの及神像」は回収の対象から外された。
(12)　昭和37（1962）年3月3日朝日新聞夕刊「“宮さん宮さん、お引っ越し”時勢に勝てぬ有栖川像」

【参考文献】

屋外彫刻調査保存研究会
2001「大熊氏廣作《有栖川宮熾仁親王像》調査報告」『屋外彫刻調査保存研究会会報　第2号』44-110
2004「戦前の文献にもとづく作品台帳作成と所在調査（全国調査）」『屋外彫刻調査保存研究会会報　第3号』1-342
木下直之
1996「記念碑にとまる鳥」『ハリボテの町』300-311、東京：朝日新聞社
2005「殿様の銅像」長岡龍作編『講座日本美術史　第4巻　造形の場』91-122、東京：東京大学出版会
2006「記念碑と建築家」鈴木博之・石山修武・伊藤毅・山岸常人編『シリーズ都市・建築・歴史　8　近代化の波及』289-347、東京：東京大学出版会
田中修二
2001「近代日本における「銅像」の空間の創出――《大村益次郎像》と《有栖川宮熾仁親王像》を中心に――」『屋外彫刻調査保存研究会会報　第2号』89-103